

ある。最下位段丘は二次性のロームを載せる。

オ三章・丘陵は主に林であるが斜面耕作も行われている。上位の段丘は穀類が主に作られる畑であり、中位段丘は南部では公共用地宅地として利用されているが西部では畑である。下位段丘に市街地の大部分があるが、その西方は蔬菜作中心の畑である。戦前は殆んど桑畑であったのに今ではごく僅である。その他土地利用での特徴は水田化傾向である。陸穂から水稻への切替が行われている。何といつても八王子の米倉は谷底平野面たる北野・田井地区である。兼業農家の増加は著しい傾向であり、首都圏整備に併つて増々助長されるであろう。家畜導入中乳用牛の増加が目立つが、明治乳業の存在も相俟つて、酪農が併せ行われれば、養業合理化への一歩となるであろう。その他宅地への転向も著しい。

オ四章・天然色写真で最も有効に用いられると今度思ったのは土色である。それによつて高度差の明瞭でない相異なる地形面の区別が容易であつた。

小櫃川下流域の地形と土地利用

松山 泰子

I 地域の概観

小櫃川は房総半島の丘陵に端を発し東京湾に流れてる諸河川の中の一つである。ここでとり上げる下流域とは小櫃川が形づくる小平野の標高5~10m以下の部分である。平野の南北を限るのは両台地の南端部に当る部分でありこの台地の地質は洪積亜砂層の成田層を基盤とし、その上に関東ロームをのせている。小櫃川の平野は房総半島の主な平野がそうであるように、海成堆積面が陸地化した隆起海岸平野に属する。(参) 中野尊正著「日本の平野」、調査地域は行政的にはほぼ木更津市に属し、その産業活動は農業に主力がそそがれているが副業としての水産業(特に海苔、貝類)も重要である。

II 地形

調査地域は低平な平野部であるので地形分類は主として航空写真に頼つた。ここに表れた局所的な排水状況は微地形を分類する上の鍵にさえなる。写真判読と現地調査(主に土壌、比高等)の結果を総合して地形分類図を作る。区分された地形：一般平野面、旧河道、浜堤及砂州、後背湿地、自然堤防(台地)本地区の地形的特色

a. 小櫃川流路の激しい変遷を示す旧河道の断片が沢山みられる事。

み、浜堤列の発達が良い事。(南北にのび東西方向に列をなす)

特にこの浜堤列は古いものから漸次頭部を東寄りから西寄りへと方向を変えており、地形発達史を考える上からも基幹となりうる。浜堤列が土地の断続的な隆起の結果各汀線沿いに形成されたものとするれば他の砂州等の堆積地形と共に発達史的な考察の上で重要な役割を演ずる。即ち、海底堆積面が陸化する前の海岸線の推定を可能にする。この様な仮定を前提とすれば浜長鎮賀(浜堤)岩根(砂川)一坂戸市場(砂嘴)を結ぶ線は或る同一時期における海岸線であった、という推定が成立つ。この線を境に多少形態の変化がみられる事は何か違った要素—例えば時間的な停滞、砂の供給量の変化—が働いた結果と考えられる

III 土地利用

地形との関係で特に指摘すべきは集落立地の問題である。即ち、低湿な地域にあつては、堆積地形は集落立地に重要な意味をもつ。調査地域でも木更津市街地、岩根、奈良輪等大きな集落は例外なく局所的な高まりである堆積地形に立地している。前被庄地下水による深井戸は飲料水として利用され又集落立地の重要な要素となつた事は確かである。

主に浜堤列向に存在する後背湿地は生産性の低い水田となるが、特に年中湛水している様な強湿地には蓮根が栽培されている。

土地利用図・集落、畑地域、水田地域、果樹園

土地利用上の特色

一毛作田の卓越→低湿な地形を反映する。

「島畑」の存在→歴史的な遺物

同様な景観を呈する東葛南部地域との比較⑤→日本の土地利用地方編
農作物の商岳化について、木更津市は地理的諸条件からみると遠郊農業地域として発達する余地はある。しかし現状では畑地は、専ら自給用作物を作る程度、都市向け蔬菜としては僅かにトマト、キュウリを作っているにすぎない。有名なレンコンはむしろ消極的な作物であり将来発展する見込は少ない。

IV. 結び

地形と土地利用を総合して生活の舞台としての小櫃川平野と考えると、一般に地形の制約や歴史的慣例から脱しきれぬ現象が目立つ。稲作重要主義の農業は少くとも日本の現状では停滞的にならざるをえず小櫃川下流域もその様な意味で農業の後進性が目立つ地域といえる。その上農作を拒む様な低湿地が卓越する地域とあつては二重の克服が必要とされる。遠郊農業地域として発展する可能性があるとはいへ例えば安房の草花栽培の様なキメ手がな

いは結局そのような性格へと踏み切る上でちゅうちよせざるを得ない原因ともなろう。

一方近來、京葉工業地帯の造成が大きく採り上げられている。もしこの大計画が実現する事になれば工業にみるべきものもない木更津市も地の利を生かした工業都市として再出発することであろう。

那須扇状地東部の自然と土地利用

— 栃木県那須郡黒羽町川西を中心として —

水谷安子

人間の諸活動は、数々の自然的、社会的条件の影響をうけている。特に農業活動においては、社会的条件の力も見逃せないが、やはり根本的には自然条件の支配を強くうけているといえよう。この意味で、ある地域の性格をつかもうとする時、その地域の自然環境を考察し、その上に繰上げられる人間活動、とくに農業が、いかなる性格のものであるかを見ることは、非常に重要であると考え。

調査地域には、三年秋に巡検に行き興味をもち、又当教室が長いこと調査地域として研究し資料の得やすい那須扇状地を選び、その中でも東部の旧川西町及び旧金田村の北東部を中心として取上げた。

そして、まず地形区分を中心に、自然環境がどの様であるのかを調べ、次に自然条件と密接なつながりをもつ農業がどの様に行われているか、中でも最近の電気揚水による水田化がどのように進められ、いかなる影響を与えているかをまとめることにした。

地形区分は当教室で既に成されている扇状地全体の区分を大いに参考にし、更に空中写真の判読、不十分なが現地調査を加えて行った。そして丘陵面、台地面、段丘面、急斜面に区分した。調査地域南端の那珂川沿いにみられるように、基盤の才三紀層は扇状地の軸に向つて傾斜しており、この盆地状の地形の所に那須・高原火山からの噴出物が堆積した。それが次第に侵蝕をうけ、起伏の多い地形が形成された。丘陵地面と区分したのは、この扇状地により埋め残された部分である。次にこの扇状地が侵蝕をうけたが、侵蝕をうけずに残つたのが台地面である。台地面形成後にロームの降下があり丘陵地、台地面に厚く堆積した。次に台地面を侵蝕した部分を新しい扇状地がおつた。この面を那珂川支流と思われる川が谷頭侵蝕を行い、段丘面を形成した。

土地利用の状況を、川西の地目別面積で概観してみると、耕地が45%、山林原野が52%で、耕地率は栃木県全体の44%と殆ど変わらず、全国平均16%に対しては大抵3倍近い値を示している。水田は畑地の2倍強、耕地の68%を占め水田地域の性格を示している。

地形面の相違は、主に地下水の賦存状況、傾斜などと関連し、土地利用にかなりの差をみせている。即ち、丘陵地は壮年的に開折を受けた斜面であり、一部の畑を除く大部分は林地である。台地面は非常に平坦であるが、10m前後のローム層の下が礫層で地下水が